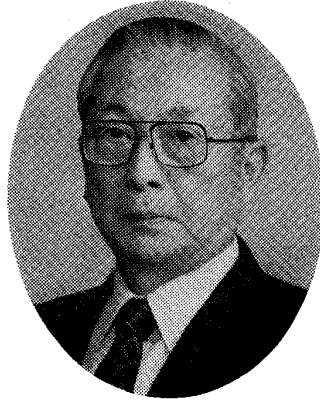
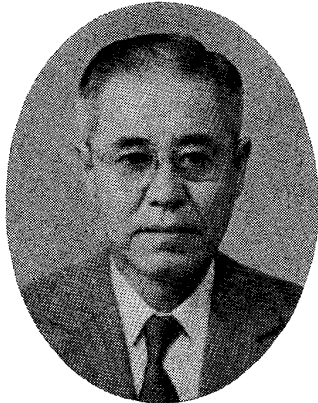


日 本 鉄 鋼 協 会 役 員
会 長

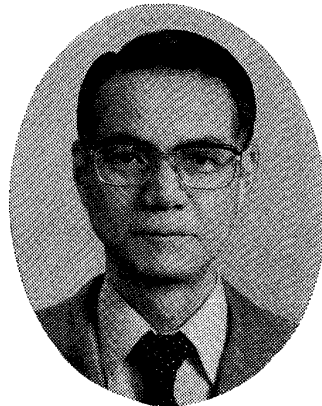


久 松 敬 弘
東京大学名誉教授
日新製鋼(株)常勤顧問

副 会 長

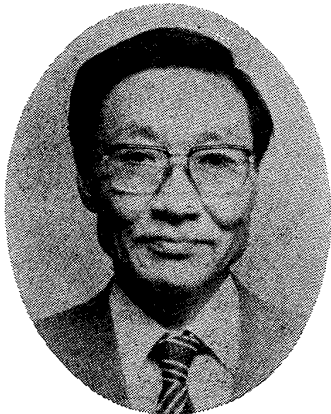


白 松 爾 郎
東伸製鋼(株)社長

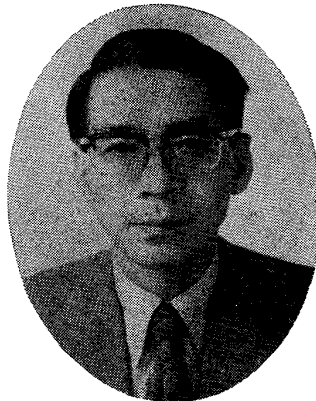


森 一 美
(研究担当兼務)
名古屋大学教授

理 事



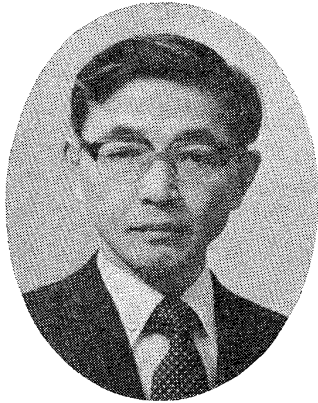
木 下 亨
専務理事



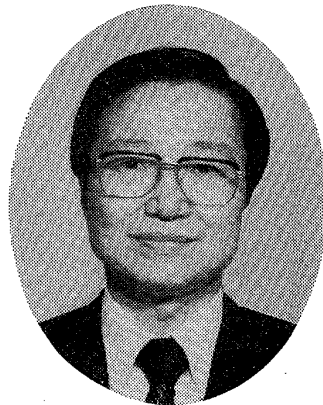
三 井 太 佑
常務理事



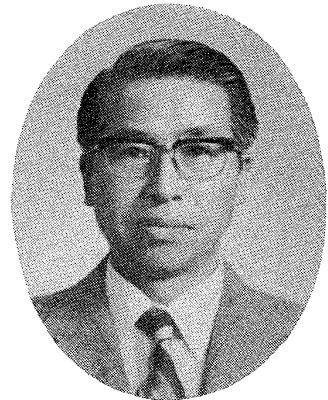
浅 野 鋼 一
(編集担当)
山陽特殊製鋼(株)常務取締役



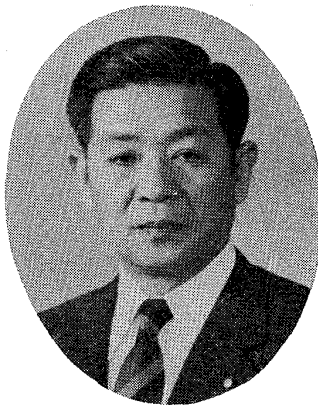
一 瀬 英 爾
(編集担当)
京都大学教授



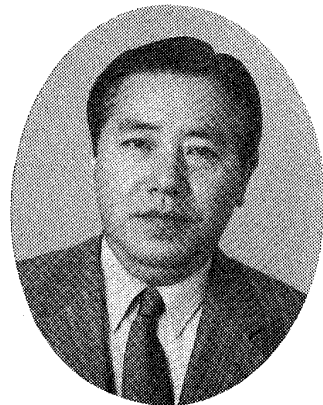
内 仲 康 夫
(研究担当)
通産省基礎産業局製鉄課長



大 谷 正 康
(編集担当)
東北大学名誉教授
(株)神戸製鋼所顧問



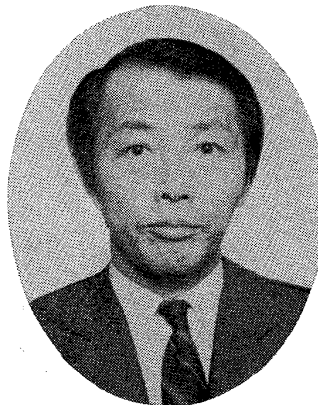
大 橋 延 夫
(企画担当)
川崎製鉄(株)取締役



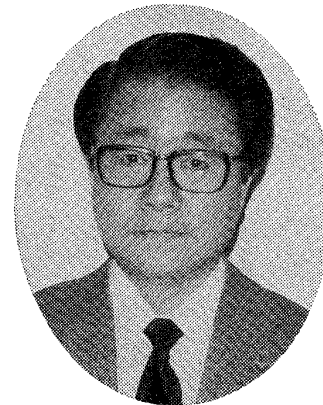
小 野 陽 一
(編集担当)
九州大学教授



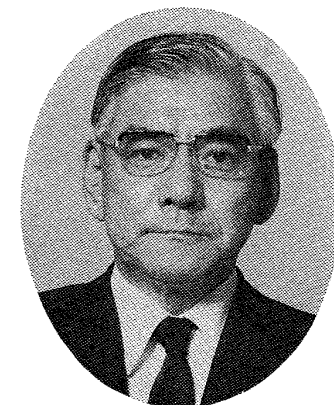
岡 雄 彦
(会計担当)
東洋鋼鈹(株)常務取締役



加 藤 健 三
(研究担当)
大阪大学教授



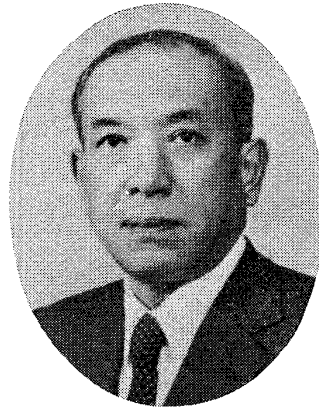
河 野 拓 夫
(企画担当)
新日本製鉄(株)取締役



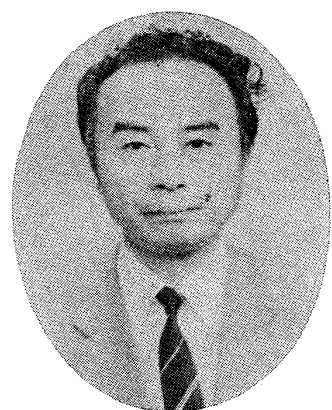
川 口 三 郎
(庶務担当)
(株)日本製鋼所顧問



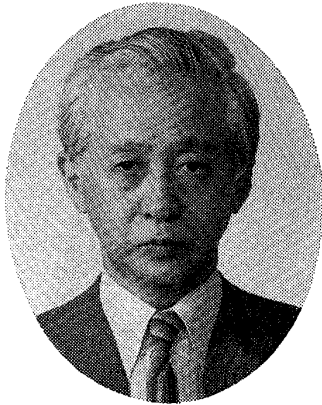
草川 隆次
(会計担当)
早稲田大学教授



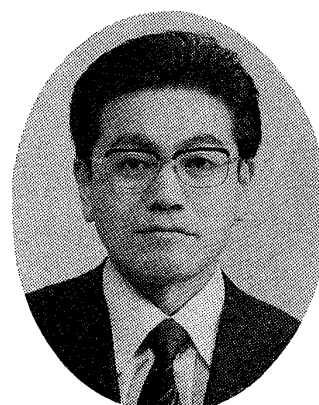
栗田 満信
(企画担当)
住友金属工業(株)専務取締役



後藤 和弘
(研究担当)
東京工業大学教授



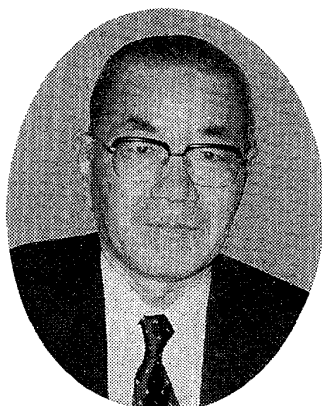
権藤 永
(企画・編集担当)
(株)中山製鋼所取締役



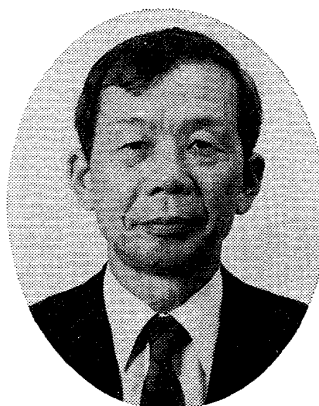
雀部 實
(編集担当)
千葉工業大学教授



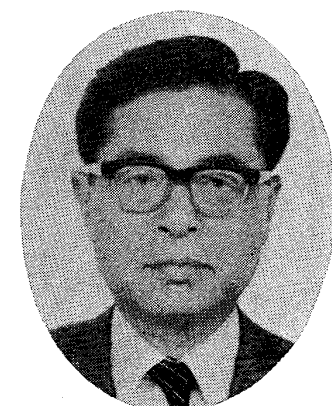
堂山 昌男
(研究担当)
東京大学教授



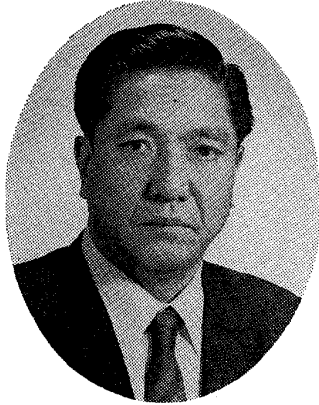
竹下 勅三
(庶務担当)
日本鉄鋼連盟常務理事



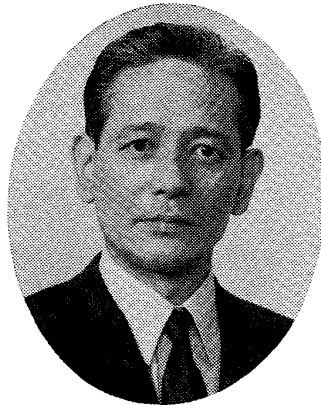
永井 親久
(会計担当)
(株)神戸製鋼所常務取締役



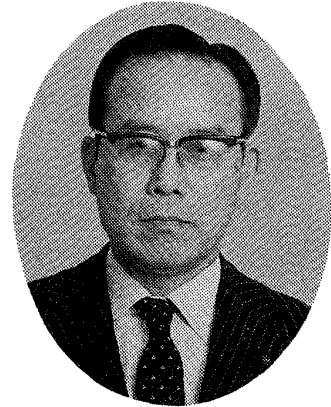
原田 利夫
(研究担当)
新日本製鉄(株)常務取締役



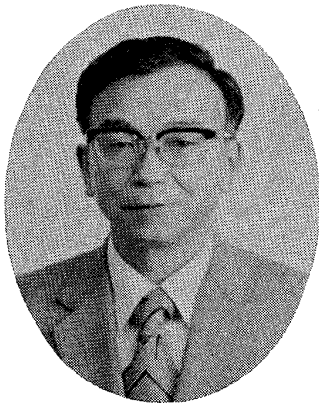
萬谷志郎
(企画担当)
東北大学教授



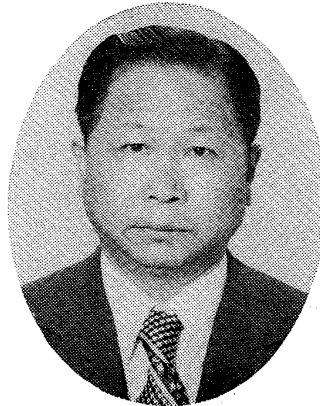
福岡利和
(庶務担当)
大同特殊鋼(株)常務取締役



松原博義
(庶務担当)
日本鋼管(株)常務取締役



松原嘉一
(研究担当)
北海道大学教授

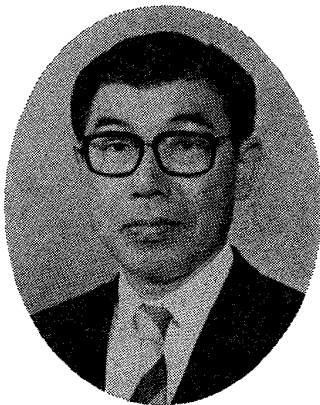


森省二
(会計担当)
日新製鋼(株)常務取締役



横井信
(研究担当)
金属材料技術研究所
材料強さ研究部長

監 事



濤崎忍
川崎製鉄(株)専務取締役



高井清
合同製鉄(株)専務取締役

新 名 誉 会 員



小 田 助 男 殿
住友金属工業株式会社相談役

氏は昭和7年3月、京都帝国大学採鉱冶金学科卒業後、同年4月住友金属工業株式会社の前身である住友伸銅鋼管株式会社に入社した。その後鋼管製造所製造部長、同所副所長、鋼管製造所長、和歌山製鉄所長を歴任し、この間取締役、常務取締役、専務取締役、副社長を経て、昭和49年相談役に就任し現在に至っている。

氏は住友金属工業(株)に入社以来、鋼管製造の技術開発とその指導育成に心力を傾注し、日本有数の製鉄所を建設するなど、鉄鋼業の伸長発展に多大の貢献をなし、その業績は世界的に高い評価を得ている。戦後経済復興の一翼を担った日本の鉄鋼業の輸出においては、石油業界で使用される油井用継目無鋼管に着目し、幾多の生産技術の改善開発を計り、優れた品質保証体制と製品の信用を備えた製造メーカーに与えられる米国石油協会のAPIモノグラムを我が国で初めて取得した。又同協会は氏の技術とたゆまぬ努力を評価し、API規格委員会の日本代表委員の就任を要請、昭和38年より10有余年にわたりよく重責を果たし斯界に貢献した。

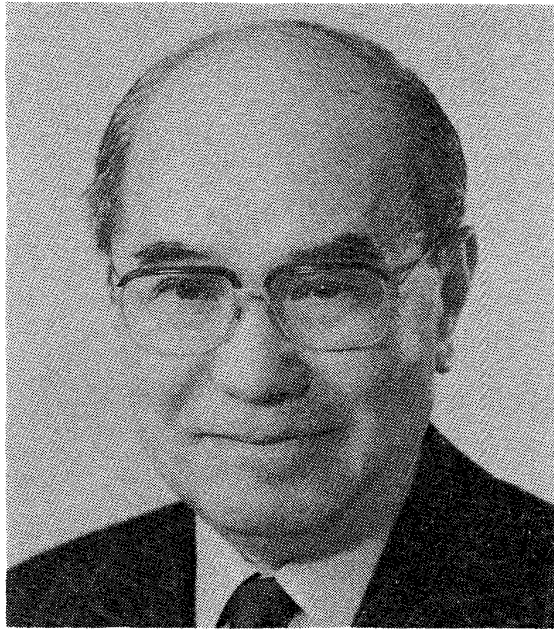
氏は火力発電所の大容量、高温高圧、石油化学精製分野での特殊鋼管の製造に力量を発揮し、従来法では困難なステンレス鋼管などの製造に仏国CIEP社のユージーンセジュールネ法を昭和34年に導入、潤滑法など製管法の改善に心血を注いだ。これらの功績により昭和46年仏国よりレジオンドヌール勲章を受章した。

氏は溶接管分野においても大きな足跡を残した。即ち米国アラスカ北極海岸の大量の原油をアラスカ南岸へ1280kmにわたる長大パイプラインで輸送するプロジェクトに対応し、これら酷寒地に耐える高強度の大径溶接鋼管を製造した。その量は30万トンを数え、日本の鉄鋼技術の秀逸さを海外に示し、名声を博したばかりでなくその後の制御圧延法の発展の礎石を築いた。

氏は又鉄鋼業の経営面においても能力を発揮し、日本経済復興と鋼材需要の増加を見込み、製鉄所の建設を決定するや工場建設計画、用地、工業用水の確保から港湾の建設に至るまで幾多の障害を克服し和歌山製鉄所を建設した。更に一層の鉄鋼需要の増加と国際競争力を備えるため設備の高度化、近代化を計り鹿島製鉄所を完成させた。これら二大臨海製鉄所の誕生は氏の力強い指導力によるところ極めて大きい。

かかる業績により本会にあつては昭和28年に香村賞、40年に製鉄功労賞、47年に渡辺義介賞、又国家より39年に藍綬褒賞、55年に勲二等瑞宝賞を受賞した。

新 名 誉 会 員



橋 口 隆 吉 殿
東京大学名誉教授
東京理科大学教授

氏は昭和 14 年 3 月東京帝国大学工学部冶金学科を卒業，中央航空研究所，海軍技術短期現役を経て，20 年 7 月東京帝国大学助教授に任ぜられ工学部冶金学科勤務，28 年 12 月工学博士の学位を取得，29 年 2 月教授に昇任，50 年 4 月停年退官，東京大学名誉教授の称号を受けた。また同年 4 月から東京理科大学教授に任ぜられ現在に至っているが，その間 51 年 10 月から 55 年 3 月まで同大学工学部長を勤めている。

氏は大学卒業以来今日まで鉄鋼その他の金属ならびに関連諸材料の物理冶金学および金属物理学的研究を続けて来たが，その内容は極めて広範な分野に亘り，主要項目として以下の 7 項目を挙げることができる。すなわち (1) 金属再結晶の反応速度論的研究 (2) 金属の内部摩擦の研究。今日“橋口ピーク”と呼ばれる緩和型内部摩擦ピークの発見とその転位論的解明。スネーク・ピークを利用した鉄鋼の内部摩擦の研究 (3) 金属から半導体にいたる多様な材料の放射線損傷の研究 (4) 金属および金属酸化物における点欠陥の研究 (5) 二酸化チタンにおける極低温電気伝導の研究 (6) 微小金属結晶の成長機構の研究 (7) 核融合炉材料の研究等である。

氏はまた本会事業の推進に当つては，理事 2 期 4 年間，うち昭和 41 年 4 月から 43 年 4 月まで副会長を勤め，引続き現在まで本会評議員を勤めている。また昭和 41 年 8 月から 55 年 4 月まで欧文会誌分科会主査として *Transactions ISIJ* を年 12 回発行に踏み切り，同誌を世界的に最高水準の学術誌とすることに力を尽した。本会事業に対するこれらの功績により，昭和 50 年協会事業功労賞が授与された。

既に述べたように氏は金属学および関連領域において優れた研究業績を挙げ，斯界に大きな貢献をしているが，それらに対して多くの賞や名誉が与えられている。すなわち昭和 49 年 4 月には本会西山賞，昭和 51 年 6 月には日本学士院賞，昭和 56 年 4 月には日本金属学会賞，昭和 57 年 5 月には本多記念賞を受賞している。また昭和 44 年 4 月にはオーストリア科学アカデミー外国人名誉会員に，昭和 56 年 4 月には日本金属学会名誉員に推薦されている。また昭和 49 年 4 月から同 50 年 4 月まで日本金属学会会長を，昭和 49 年 5 月から現在に至るまで日本結晶成長学会会長を勤めている。

新 名 誉 会 員



John Olof EDSTRÖM 殿

スウェーデン王立工科大学鉱山鉄鋼学科教授

氏は 1926 年 5 月ストックホルムで生れ、1950 年王立工科大学を卒業、1953 年同大学助手、1954 年米国 Minnesota 大学助手、1955 年から 1957 年まで Jernkontoret の研究員、1958 年博士号を取得、1958 年より Sandvik 社冶金研究部長、1960 年同社研究開発担当副社長を経て 1965 年同社副社長、1970 年から 1976 年は Norrbotten Steel Works の社長を勤めた。その間 1960 年には王立工科大学鉄鋼冶金学客員教授になり、また 1970 年より 1977 年までは Luleå 大学理事長を勤めた。その後王立工科大学に戻って鉱山鉄鋼学科教授となり現在に至っている。

氏は大学を卒業して研究生活に入るや、鉄鋼の製錬とくに鉄鉱石類の還元、溶融還元、溶鋼の処理等の研究に専念し幾多の有益な論文を発表し、その研究成果は広く各国より認められ、またスウェーデン鉄鋼業の発展にも大きい足跡を残した。

そのため 1968 年にはスウェーデン王立理工学アカデミーの会員に推挙され、1973 年には鉄鋼業における特別業績ゴールドメダルを受け、1975 年には Vasa 勲章を授与された。

氏は日本との交流に意を用い、1981 年の第 3 回日本・スウェーデンシンポジウム、1985 年の日本・スウェーデン鉄鋼技術会議において論文発表するなど本会の活動を通じても学術・技術の交流に貢献されている。

なお、氏の発表した主要論文のいくつかを挙げると次の通りである。

“The Mechanism of Reduction of Iron Oxides”, 1953

“Studies on Some Chemical Reactions Involved in the Pelletizing and Reduction of Iron Oxides”, 1958

“Ways of Using High Phosphorous Ores as a Base for High Quality Steelmaking”, 1982

“Technology and Economic Viability of Smelting Reduction Processes”, 1983

“Dephosphorization of Hot Metal with Medium Phosphorous Content”, 1984